旅と子ども

野口　明

一般論として、人生における旅の効用と妙味とは、誰も否定しないであろうが、心身共に未熟な子どもの場合には、それほどのことはないように思われる。私は幼児教育の専門家ではないから、結局私自身の体験から考える外はなく、その結論は以上の如くになるのである。

私は小学校三年の時から寄宿舎に入れられた。一家が海外に住むようになったので、小学校で寄宿舎のある暁星学校に転学せしめられたのである。この学校はフランス人の経営であったから、修学旅行などは問題外であった。もっとも公立の小学校や中学校でも、今日の如く猫も杓子も修学旅行に出る風はなかった時代でもあった。

私が小学校の何年生の頃だったか、伯父一家に連れられて箱根の塔之沢温泉に数日滞在したことがある。今と異って自動車も無い頃故、せいぜい宿の付近を散歩する位で、名所としては玉簾（たまだれ）の滝という子どもだましみたい

な滝に失望した記憶があるだけである。次に小学校を卒業した春休みに、祖父に連れられて、関西の親族めぐりをした。子どもとしてはじめての大旅行であったから、今も多少のことは記憶にある。京都も奈良も代表的な名所は見たが、一番印象に強く残ったのは、その頃清涼飲料のはしりとして世に出た三ツ矢サイダーの産地のことである。大阪から能勢の妙見宮に行くとて、池田まで汽車、それから陸路平野という渓谷を過ぎる時、そこで湧出する天然の炭酸泉を採取して平野水または三ツ矢サイダーとして売られることを聞いて驚いたのである。つまり私の知識は平野水に関心を持つ程度であったのである。もう一つ京都で、平野神社の近くの伯父の家から嵐山まで歩いた時、まだ嵐山電車もなく、人家も少なく、菜の花、桃の花の上に御室の五重塔が霞んで、所謂嵯峨野の春色を子どもながらに強く印象に止め得たことは、むしろ大出来というべきであったろう。

中学に入ってからは、毎年夏休みには祖父が身延山に参詣するのに、荷物持ちに連れられた。身延に詣して七面山に登り帰路は東海道線に依るから、前後一週間位かかる本格的の旅であった。甲州の山川に親み、旅籠に寺坊に泊り、ガタ馬車に川舟に乗り、峠を越え山に登るなど変化に富んでいた。私の後年の山水癖はこの恒例の身延詣に培われたように思う。しかし年齢としては子ども時代というよりも青年時代という方が適当であろう。

私は六十歳で第一線を退き、その後は専ら道楽の洋画に没頭している。先年奈良の春日神社の裏手、宝庫の傍らに有名な七種の寄生木のあるあたりで写生をした時のこと。小学校の修学旅行の一団が来るや、どっと私をとり巻いてしまった。先生が寄生木の説明をしようと呼ぶのだが、生徒はさっぱり動かなくて、先生に悪いように思えた。つまり学校で図画を教えられて絵には興味を覚えるが、寄生木の如き高級な植物学的問題には興味を感じないのである。

法隆寺で南大門前の茶屋で食事をした時、傍らにビールと折詰で食事をしている男女の一組があった。「毎年同じところばかりでかなわんナー」と漏して一睡りと横になる者もいた。よく見ると修学旅行を引率して来た先生たちで、生徒たちを一人の先生の監督に託して見学させ、自分たちは休憩しているのであった。私は見る可からざるものを見たような気がした。その店を出て、廻廊の外から五重塔を見ていると、ぞろぞろ幼稚園児の一群が行くのを見た。私は幼稚園児と法隆寺の組み合わせにも不均衡なものを感じた。これらの先生たちは何を考えているのであろうか。

修学旅行の意義や効果については、文部省あたりはいろいろ研究もし指導もしているであろう。行き届いた学校では、時間をかけて準備もし、実施に当たってはエチケット、衛生、見学内容について十分心を用いていることと思う。単に知識のためだけではなく、種々の訓練、躾け、旅行の楽しみ等、いろいろ得るところもあろう。私は一概に修学旅行を無益有害とは思わないが、しかし、私の如く一度も経験しなくても別に損をしたとも思わない。日本の学校は確かに修学旅行に熱心である。それは親が子どもを連れて旅行をするその時間も、その経済力も乏しいところから来た埋め合わせ現象かも知れない。

昔は「可愛い子には旅をさせよ」という諺があった。その頃は、旅には多少の不自由、苦痛、危険があり、それに対処するところに喜びと自信があり、その外人情の機微にも触れる機会があった。今日の旅は、乗物、旅館、食物まで改善が著しく、旅はむしろ必要以上に贅沢の要素を加えた。しかし旅がスピード化し、観光化する

と共に、旅の興味、感激、収穫は減じたように思われる。私は何時もこの乗物づくめの旅からは、昔のような深い感動も、正確な地理感も、興味深い歴史感も感ずることが少なくなったように思う。今や本当の旅らしい旅は、山の旅位のもの、多くは旅でなく遊びに近づいている。見学と行楽とは本来違うものである。私は子どもの旅を考える時、その方法や程度はなかなかむずかしい問題を含むように思う。

✤

私は何時も旅から帰って、予備知識の不足だったことを歎ずる。肝甚のものを見落としたり、よく見なかったり、そして後から参考書を読んで知識を補充することがしばしばある。子どもの旅も同様で、知識の枠が頭にできていてこそ旅先で新知識が収まるところに収まり得る。旅を生かすも、知識次第、人次第、従って旅の仕方次第ということになる。

✤

私は江戸時代の代表的教育者兼学者として、初期の中江藤樹、中期の伊藤仁斎、末期の広瀬淡窓の三人を選ぶ。然るに三人揃ってあまり健康でなく、ほとんど旅をしていない。藤樹は喘息持ちで遠遊はせず、仁斎は五十を過ぎて初めて先祖の出た泉州堺に行って海を見たといわれ、淡窓は九州から只一歩馬関の土は踏んだが、九州以外はその一歩だけであったといわれる。そして仁斎と淡窓の塾には全国ほとんど各国から留学生が集まっている。学門の種類にもよるが、こうなると旅の人生的意義も案外大したものでもないようにさえ思う。

✤

私は旅と子どもというテーマに対し簡単に結論づけると、関東の子どもは関西へ、関西の子どもは関東へ、あまり欲張らず過重な負担を負わさずに、楽しくあっさりと見せる程度が一番適当かと思うがいかがであろうか。